

音声模倣の教え方

2008/5/17 大阪定例会

藤坂龍司

1. 音声模倣を教えるにあたって

<前提>

- ・動作模倣、音声指示がある程度出来ている
- ・3分～5分、椅子に座って、課題に前向きに取り組める
- ・セラピー中、促されれば1～2秒、大人の顔や教材を注視できる。

<姿勢>

机を挟まずに近い距離で向かい合っ。子どもをやや高い位置にすわらせ、大人は姿勢を低くして、大人の口がよく見えるようにする。

<手順>

単音模倣 → 音節や単語の模倣 → 声の大きさ、長さ、抑揚の模倣

2. 単音模倣

(1) 最初の音の形成

- | | | |
|-------|------------------|---------------------|
| ステップ1 | すべての発声を強化 | 「ディ、ディ、バ、バ」「ああ、上手ね」 |
| | ↓ | |
| ステップ2 | 大人の発声の直後の発声のみを強化 | 大人「ア」子「ディディ」大人「上手！」 |
| | ↓ | |
| ステップ3 | 大人の発声と似た発声のみを強化 | 大人「ア」子「ウワ」大人「上手」 |
| | ↓ | |
| ステップ4 | 大人の発声と同じ発声のみを強化 | 大人「ア」子「ア」大人「上手」 |

<音の作り方：その1>

どうやって似た音を作るか

①シェイピング

少しでも近い音を強化し、徐々に目標に近づいていく

②口形模倣

口元を見せて、形をまねさせる

③手を使って（身体援助）

指を使って口を開けさせたり、逆につむらせたり

④逆エコー

子どもが発する音に逆に大人が合わせて後追いで発声する。うまくすればそれが強化子となり、子どもは大人の発声に自分から合わせてくるようになる（音のマッチングが強化子に）

(2) 最初の音と第二の音の弁別

ステップ1 第二の音の形成 最初の音と同じようにして

↓

ステップ2 第一の音の再形成

↓

ステップ3 第一の音と第二の音のランダムローテーション

(3) 三つ目以降

新しい音を引き出しては、既存の音とランダムローテーション

<音の作り方：その2>

①自然に出た音を拾う

日常生活でよく自発する音を、音声模倣に取り入れる

②「不意打ち」法

既存の音をコントラストをつけてバラバラに模倣させ、音に対する感受性を高めてから、不意に新しい音を入れると、ポツと出ることがある。目指す音そのものがでなくても、別の新しい音ができることもある。(下の例で、○が新しい音)

「ア、タ、オ、ブ、**マ**」「カ、ウ、シ、ワ、**キ**」

③いもづる法

同じ行(同じ子音)にどれか出ている音があれば、それを手がかりに、口の形の変化を強調するなどして別の音を引き出す。

「マ」が出ているとすると、「マ、マ、マ、ミ」で「ミ」を引き出す。

「マ」と「モ」が出ているとすると、「マ、モ、ミ」で「ミ」を引き出す。

(口の形をよく見せて、それが「イ」の形に変化することを手がかりにして「ミ」を引き出す場合と、口を見せずに、耳元で音の変化だけを聞かせて、その変化に釣られて自分の音も変化させる方法とがある)

同じ列(同じ母音)の他の音を言わせて、そこに新しい音を入れる

「あ、か、わ、**は**」

④合成法

すでに出ている音を組み合わせることで新しい音を作れるときがある。

「ウ」+「ア」→「ワ」 「イ」+「ア」→「ヤ」 「ン」+「ア」→「マ」

⑤身体援助法(その2)

☆「シ」の出し方

手のひらを横にして、あごの真ん中につけて、あごの肉を押し上げるようにしながら、「シ」という(あごの肉を押し上げることによって、口内で舌が上に上がり、「イ」が摩擦音の「シ」に変化する。

☆「カ」の出し方

「タ」が出ているときは、「タ」を何度か言わせながら、何度か目にスプーンなどで唇の前の方を押さえると「カ」が言えることがある。「タ」を言おうとして上がった唇が、前歯の後ろに当たることができず、奥の方で上あごにあたるため。

⑥音声指示、物の受容的命名の利用

音声模倣と並行して、音声指示や物の受容的命名の訓練をしていると、指示の言葉に釣られて、不明確ながらに自発的に模倣を始めることがある。

⑦文字の利用

文字の好きな子は、文字カードを見せながら発声させることで、新しい音を促せることがある

<やってはいけないこと>

★いずれの方法でも、1, 2度やって目指す音がでなかったら、すぐに中断して、得意な音を言わせて強化する。同じ音で何度も失敗させると、やる気を失ったり、間違った反応が定着してしまう（何でも「バ」で済ませてしまうなど）ので、絶対に避けること。

★「あいうえお」の順に練習しないこと。これをやると、「あ」というだけで「あいうえお」と言ったり、「あ」というと「い」と言ってしまうたりして、音声模倣にならない。必ずバラバラな順番で言わせよう。

3. 音節、単語模倣

単音が50音表の三分の一くらい出るようになったら、単音模倣を継続しながら、音節や単語の模倣に取りかかる。

(1) 音節模倣

・意味のある単語だけを練習していると、子どもは覚えてしまって、例えば「ぼ」というと「ぼうし」、「く」というと「くるま」などと言うようになる。それでは模倣とはいえないので、意味のあるなしにかかわらずいろんな音の組み合わせを聞かせて、その通りにまねさせる練習をする

例：くし、くま、くた、こた、あた、いた、いし、いま・・・

・最初は二音から。すでに言える音を組み合わせ、ゆっくり伸ばし気味に言ってやり、それをまねさせる。言えたら、徐々に二音をいうスピードを普通に近づけていく。言えなくなったら、また少し前のスピードにもどす。

(この練習を始めたら、単音模倣でも、1音1音区切って言う練習だけではなく、こちらは流れるような調子で、「アーバーオーミー」などと言い、そこから音の変化を聞き取ってまねさせる練習をするとよい。その場合、子どもの反応は途切れ途切れ(「ア、バ、オ、ミ」)でもよい)

・同じ音の連続は比較的言いやすいので、それから練習するとよい(例「マ・マ」)。次は同じ子音の音

(例：「バ・ブ」)。

一番難しいのが、違う子音の音の組み合わせなので、これは後にする(例：「フ・ミ」)。ただし組み合わせによっては言いやすいものもある(例：「ブ・タ」)

・一般に、口を大きく開けて発音する音から、小さい口の音への移行の方が、小さい口から、大きい口への移行よりもやりやすいようだ。そこでそのような組み合わせから練習する。言いにくいものは、よほど後にする。

○「マ・ミ」

×「ミ・マ」

・音節模倣の中に、時々単音も混ぜること。そうしないと、単音を言っても、連続音で返すようになる。

例：マ、ママ、マミ、マモ、バ、ババ、バブ、ア、アカ、アイ、アシ・・・

・三音になると、組み合わせが厩大になりすぎるので、意味のある単語を中心に練習するとよい。

(2) 単語模倣

・最初は言いやすい1音節や2音節の単語から。物の受容的命名ですでに知っている名前や、これから教えそうな名前を選ぶとよい。「パン」や「ゾウ」は1音節と考える。同じ音の組み合わせは言いやすいので、積極的に取り入れる。

例：パン、ブービー、チャチャ、ゾウ、ママ、ネンネ、ウマ・・・

・物の受容的命名をしていると、物の名前の語尾だけをまねしたり、全体を不明瞭・不正確ながら、まねしようとすることがある。それは尊重して、大いに強化するとよい。最初は下手でも、やっているうちに徐々に上手になっていくことが多い。その状態で、音声模倣としてだけでなく、物の表出的命名に持って行ってかまわない。

ただしいつまでも上手にならなければ、単語模倣の訓練で、上手にする必要がある。

・三音の単語がうまく言えないときは、後ろの音から徐々にバックチェイニングでつないでいくとよい。

例：「あたま」

例：「ま」→「たま」→「あ・たま」